

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2017年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学	研究科 コミュニティ福祉学	専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	立教大学 教授	結城 俊哉 印	
研究課題名	放課後等デイサービスにおける運動療育が与える効果とその影響に関する考察		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻 博士前期課程二年	江村 拓哉 印	
研究期間	2017年度		
研究経費	100千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

放課後等デイサービスは日常生活の場であると同時に、協調性やマナーなど様々な能力を身につける役割を果たしている。本研究では運動療育を通じて、運動の楽しさや効果を学び、実感するだけでなく、生きがいや他者からの承認、体調の自己管理など就学を終えたあとの生活の質(QOL)も高めることを目的としている。

運動療育プログラムを実施し評価シートに記入。半年を目安にプログラムを実施した後、当事者とその保護者に半構造化インタビューを実施する。インタビュー内容をKJ法により抽出し、評価シートを参考にしながら、比較検討および考察を行う。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[放課後等デイサービス] [障害福祉] [運動療育]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**研究背景**

現在、我が国では、発達障害児数の増加が多く報告されている。文部科学省の平成 24 年度の調査によると、約 6.5% の割合で通常学級に発達障害の可能性のある特別な教育支援が必要とする児童が在籍しているとされ、発達障害(注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群、学習障害、広汎性発達障害、自閉症スペクトラムなど)と診断される数が増えていることを考慮すると、現在でもその割合は増加傾向にあると考えられる。また社会人になってから自分が発達障害であったことに気づくいわゆる大人の発達障害など、社会的に多くの注目が集まりつつある分野である。さらに細田ら(2017)によると、発達障害児は運動面の不器用さや社会性の課題が指摘されている。こうした点から、学校や社会における集団生活だけでなく、就労と関連する上肢機能に関する課題は非常に重要であると言える。また体調管理を施設の職員が実施していることも多く、自らの体調管理をする機会が乏しく、将来の自律した生活を送るうえで弊害となり得る。

研究目的

運動療育を実施し、インタビュー調査と評価シートを比較検討することで、運動療育が与える影響の示唆を得る。

研究方法

運動療育はトレーニング、コーディネーション、道具を用いた運動の三種類があり、それぞれの療育ごとに評価シートを作成している。研究方法としては放課後等デイサービスにおいて運動療育を実施し、随時評価シートを記入する。その後当事者とその保護者に対して半構造化インタビューを行う。得られた情報を KJ 法によって抽出し、比較検討および考察を行う。

トレーニング

トレーニングを継続することによって、筋力が向上することに伴い、力をコントロールする能力を育成することができる。筋力がないと、力を入れることも難しければ、逆に力を抜くことも難しい。身体をコントロールするという意味でも重要度は非常に高い。

また、筋力トレーニングをすることは、忍耐と努力が伴う。そのため、子どものそういった姿勢をきちんと評価し、誉めてあげることが大切である。「がんばったことに対する評価」であるため、子どもたちにとっても誉めの言葉に手応えを感じやすい。

さらに、トレーニングをすることによって自律神経系のバランスの乱れが改善されることも報告されている。これは、トレーニングをすることによって交感神経(興奮作用がある)が働くとともに、副交感神経(鎮静作用がある)も同時に働く。これを継続することによって自律神経系のバランスが整うのである。

コーディネーション

コーディネーション運動とは神経系の運動能力の向上を目的とした運動である。コーディネーションの能力には、リズム能力、バランス能力、変換能力、反応能力、連結能力、定位能力、識別能力の 7 つがある。これらは運動神経の発達を促し、スポーツ全般の運動能力に大きく関わるだけでなく、コミュニケーション能力や学習能力にも関連している能力であるといわれている。

現在はトップアスリートの育成から、高齢者や障害者のスポーツまで幅広く取り入れられている。運動の特性上、従来のトレーニングのようなきつくて辛いものとはかけ離れているものであり、みんなで楽しく汗をかけるものが多いため、運動の魅力を伝えるためにコーディネーション運動を取り入れることは有効であると考えられる。

道具を用いた運動

道具を用いた運動療育プログラムの特性としては、まず多くの子どもにとって楽しいものであることが一つあげられる。運動に親しむ意欲を育む観点から、これは大切である。

また、自分の体ではないものを扱うことは、体を扱う以上に難しい行為である。したがって道具をうまく使いこなして運動できる能力を育むことができれば、運動能力の向上に大きく関わると考えられる。

研究結果

現在、参与観察中であるためインタビュー調査等は実施しておらず、今後実施する予定である。

研究成果の概要 つづき

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

特にありません。